令和５年度　第３期
未修者小論文試験問題

受験上の注意事項

1　監督者の指示がある前に、この問題を開くことを禁止します。

2　試験開始の合図により、解答を始めてください。

3　試験開始の合図の後、印刷不鮮明等に気付いた場合は、黙って手を挙げ、監督者に申し出てください。

4　解答は、答案用紙に黒インクのペン又はボールペンにより書いてください。
　消せるボールペンや時間の経過により字が消えるボールペンは使用しないでください。また、鉛筆は不可です。

5　試験時間は90分です。
　試験開始後20分以内及び試験終了前５分間は、答案の提出及び試験室からの退出はできません。それ以外の時間に退出（途中退出）する場合には、黙って手を挙げ、自席で答案及び問題を監督者に渡してから退出してください。

6　この問題は、試験終了後、持ち帰ることができます。

7　次のもの以外は机上に置かないでください。
　受験票、筆記具、時計（計算機能等のないものに限る。）、眼鏡。
　受験票は、氏名、受験番号が記載されている面を表にして、監督者が見やすい位置に置いてください。なお、上記以外のものについては、監督者の許可を得てください。

8　問題検討のためのラインマーカー及び色鉛筆の使用は、問題用紙に限り認めます。

9　携帯電話等は、必ず電源を切って鞄等にしまってください。

10　試験室内では、耳栓の使用はできません。

11　試験時間中の発病等やむを得ない場合には、黙って手を挙げ、監督者の指示に従ってください。

12　試験時間中の喫煙や飲食（ガム等を含む。）は、禁止します。

13　試験終了の合図とともに、直ちに筆記具を置き、監督者の指示を待ってください。

14　不正の手段によって試験を受け、又は受けようとした者に対しては、試験を停止し、合格の決定を取り消すことがあります。

〔問　　題〕

次の文章を読んで、後記［設問１］及び［設問２］に答えなさい。

〈やさしい日本語〉と、多様性への想像力

日本語学・日本語教育学者の庵功雄（いおりいさお）さんが著した『やさしい日本語[1)]』は、簡略化された〈やさしい日本語〉の概要を示しつつ、社会におけるその重要性を指摘しており、目下の論点にとって非常に参考になる著書だ。

そこで提唱されている〈やさしい日本語〉とは、簡単にまとめるならば、（１）語彙を絞る、（２）文型を集約するなどして文法を制限する、（３）難しい表現を噛み砕く、といった方法により、特定の障害のある人や在日外国人などにとっても習得や理解がしやすいように調整された日本語のことだ。

この〈やさしい日本語〉は、災害時における行政やメディアによる広範な情報発信という用途のほか、平時においても、多様な人々が暮らす日本の地域社会の共通言語として用いることによって、社会的包摂や多文化共生につながることが目指されている。具体的には、たとえば、

「地震直後に必要になる水や保存食はもちろんのこと、給水車から給水を受けるためのポリタンク等も事前に購入しておきたい」

という日本語ネイティブ向けの防災の呼びかけは、

「地震のすぐあとのための水や食べ物はとても大事です。水をもらうときのためのポリタンク（水を入れるもの）も買ってください」

といった文章に言い換えることが推奨される（『やさしい日本語』187―188頁）。

同書中で紹介されているエピソードのなかで特に印象深いのは、聴覚に障害のある一人の男性のエピソードだ。彼はろう学校で必死に日本語を学んだが、彼の母語である日本手話が日本語と大きく文法体系が異なることなどもあり、敬語の使い分けや助詞の使い方などはうまく習得できなかった。就職後、彼が「てにをは」の不自然な文――たとえば、〈仕事が終わらせる〉など――を書いたりすると、周囲の同僚にからかわれたり、蔑まれたりするようになり、相当の辛苦を味わったという（同書138―139頁）。同様のつらい思いは、日本で働く在日外国人なども少なからず経験していることだろう。

日本語を母語とする者が高度に使いこなしているものを皆が従うべき「規範」として立て、そこから逸脱した使用を嘲（あざけ）ったり厳しく注意したりするのでは、社会的包摂や多文化共生からは遠ざかるばかりだろう。むしろ、「日本で安心して生活するために最低限必要な日本語」（同書86頁）を基準に皆が日本語の学習やコミュニケーションのあり方を考えていくことは、

特定の障害のある人や在日外国人などが「日本の中に自らの「居場所」を作る」（同書73頁）ことにつながりうる。

日本語ネイティブにとっての意義

以上の指摘は非常に重要だ。〈やさしい日本語〉を知恵を絞って構築し、日本語教育の現場などに普及させて日本語習得のハードルを下げることは、たとえば移民など、この国の地域社会で生きていく必要のある人々にとっても、また、彼らと共生していく日本語ネイティブの住民にとっても有益であることは間違いない。

さらに、同書では、〈やさしい日本語〉はそのほかの点でも日本語ネイティブ自身にとって大いに恩恵があると指摘されている。私も含め、日本語ネイティブはしばしば、「「適当に言っても通じる」というある種の「甘え」」（同書184頁）のなかにいる。たとえば、企業でも官庁でも大学等々でも、自分でもよく分かっていない曖昧な業界用語を符丁のように用いて、仲間内でうなずき合って過ごす、というのはよく見られる光景だ。また、無駄に難しい言葉をこねくり回して立派な話をしているように見せかける、というケースもしばしばあるだろう。

そうした甘えや幻惑から脱して、自分とは異なる背景を有する相手の立場に立ち、物事を分かりやすく表現して伝えようとすることは、多くの場面でコミュニケーションの成功の機会を増やしてくれるほか、物事のより明確な理解や、より多角的な理解を促進してくれるだろう。

すべてのケースで受容されるべきか

ただし、<u>〈やさしい日本語〉が日本語それ自体の規範になってはならない。</u>私はこの一点に関してのみ、〈やさしい日本語〉の推進に対して一抹の懸念を抱いている。

たとえば同書では、日本語ネイティブにとっては拙（つたな）く思えるような日本語も一種の「方言」ないし日本語のバリエーションであって、たとえば在日外国人がそうした日本語で「大学のレポートや会社のビジネス文書を書いても受容すべきだ」（同書207頁）と言われている。もしもこの主張が、あらゆるレポートやビジネス文書についての規範的主張として展開されているのだとしたら、それには明確に反対したい。

大学教員としての私自身の経験でいえば、たとえば授業に出ている留学生と話し、その人の母語が日本語ではないと了解した場合には、その学生が日本語で書いたレポートについては、基本的に表現の部分に関する配慮を行っている。誤字脱字が多かったり、「てにをは」がおかしい箇所があったり、単語の選択に疑問があったりする場合でも、おおよそ目を瞑っている。そして、内容の方を重視して精査している。他方で、日本語ネイティブの学生については、そうした表現上のおかしさは減点の対象にしている。

私は、これが不公平な処置だとは思わない（ネイティブと非ネイティブの境界線が曖昧であるなど、微妙なケースは存在するけれども）。レポートの提出や採点といった一連の過程は、単位認定などのための評価の場であると同時に、教育の場でもある。それゆえ、採点の基準も、個々の学生の力を伸ばす方向で考えるべきであって、機械が採点するのではないのだから、画一的な基準で片づけるべきではない。ケースバイケースで、教員がそのつど頭を悩ませながら考えるべき事柄だろう。

たとえば私は、非日本語ネイティブの留学生が日本の大学院への入学を志望しており、将来的に日本語で論文を書く意志がある場合には、誤字脱字や「てにをは」の乱れなどの表現上おかしい部分について、学生の希望や習熟度に応じて指摘するようにしている。というのも、「てにをは」は必ずしも些細なものなどではなく、誤読を引き起こさない正確な文章を書く際に、しばしば非常に重要なポイントになるからだ。

ビジネス文書に関しても、同様にケースバイケースと言えるだろう。「てにをは」や単語の選択などが重要なケースもあれば、そうでないケースもある。当該の文書がどのような目的で書かれ、どのような場で読まれるか等々によって、日本語ネイティブがそれを受容すべきかどうかは当然変わってくるのである。

言葉には、考えそのものをかたちづくる役割がある

また、たとえば専門家の繰り出す表現がときに難しいものになるのは、難しい言葉を無駄にこねくり回しているから――本当は分かりやすく言えるのに、敢えて好きこのんで難しい言葉を用いているから――というケースも確かにあるが、そればかりではない。

医学であれ、工学であれ、法学等々であれ、専門家が扱う問題は、まさにその道の専門家が必要であるほどに、そもそも難しい。複雑な問題をあるがままに正確に捉え、解決の方途を正確に言い表そうとするならば、その表現はおのずと複雑で、繊細なものになっていく。

もっとも、専門家は常に難しい言葉の使用に終始していればよいというわけではない。専門家と市民との十分なコミュニケーションは本当に重要であり、そこでは難しい言葉はしっかりと噛み砕かれるべきだ。ただし、その前にまずもって、専門の領域において突き詰めた思考と表現が必要なのだ。

また、種々の社会問題の込み入った中身に分け入ったり、人間の心理の微妙な襞（ひだ）を分析したり、古来受け継がれてきた世界観や価値観の内実を浮き彫りにしたり、といった場合にも、慎重に繊細に言葉を練り上げることが必要となる。そうやって腐心することではじめて表現できることがあり、その表現によってはじめて見えてくるものがあるのだ。そして、そのような実践が可能であるためには、言語という巨大な文化遺産の奥深くにアクセスし、その厖大な蓄積

を利用しつつ、変更を加えたり新たなものを付け加えたりしていく道が、私たちに確保されていなければならない。つまり、〈やさしい日本語〉ではなく、前掲書で言うところの「精密コードとしての日本語」（同書209頁）を用いることが、そこでは可能でなければならない。

しかもそれは、各分野の専門家や、あるいは作家といった職業の人に可能であればよい、というものではない。〈精密コードとしての日本語〉の使用が私たちのうちのごく一部に限られてしまえば、そこに大きな知的格差や、あるいは権威・権力の偏りが生まれ、日本語は非民主化されてしまうことになる。また、そもそも、過去の言葉の蓄積を理解できる人が少なくなれば、その分だけ遺産自体が先細り、朽ちていってしまうことになる。

要するに、言葉は常に伝達のための手段であるわけではなく、しばしば、言葉のまとまりをかたちづくること――表現を得ること――それ自体が目的となる場合がある、ということだ。その点で、「日本語母語話者にとって最も重要な日本語能力は、「自分の考えを相手に伝えて、相手を説得する」ということである」（同書181頁）という、同書で繰り返されている主張は、言葉の働きの一方を強調し過ぎているように思われる。もちろん、その種のコミュニケーションスキルもきわめて重要だ。しかし、これがほかの何よりも重要であるというわけではない。すなわち、その伝えるべき「自分の考え」それ自体を生み出すことも、同じくらい重要な言葉の働きなのである。

表現力と思考力の低下を招かないために

それから、言語の簡素化と平明化を推進することが、必ずしも言語の民主化につながるとは限らない、という点も強調しておくべきだろう。

多様な人々の間で用いられる共通言語を意図してつくろうとする際には、一般的に、語彙と文法を制限して学習や運用のコストを減らすという方法がとられる。しかし、人工的な共通言語のこうした特徴は、たとえばジョージ・オーウェル（1903―1950）の小説『1984』[2] に登場する、全体主義国家の公用語「ニュースピーク」の特徴と似通っている。

本書第一章でいくつか具体的な事例を通して確認したように、多くの言葉は、物事に対する特定の見方、世界観、価値観といったものを含んでいる。（たとえば、「土足で踏み込む」、「かわいい」、「しあわせ」など。）言葉は思考を運ぶ単なる乗り物なのではなく、ある種、「思考が言語に依存している」（『1984』460頁）とも言えるのである。そして、件（くだん）の全体主義国家は、言語のこの特徴を最大限に利用している。すなわち、旧来の英語を改良した「ニュースピーク」なる新しい言語を発明し、その使用を強制することによって、国民の表現力や思考力を弱め、全体主義に適う物事の見方に嵌（は）め込むのである。

ニュースピークの具体的な設計思想は、文法を極力シンプルで規則的なものにすること、そ

して、体制の維持や強化にとって不要な語彙を削減し続けることである。小説の登場人物の口からは、「年々ボキャブラリーが減少し続けている言語は世界でニュースピークだけだ」（同書82頁）とも語られている。たとえば、「good（良い）」という言葉の程度を強めるのに「excellent（素晴らしい）」とか「splendid（見事）」といった言葉があるのは無駄であって、「plusgood（＋良い）」とか「doubleplusgood（＋＋良い）」という言葉で十分とされる（同書81頁）。作者のオーウェルは、小説の付録として「ニュースピークの諸原理」を詳細に著しているが、そこで彼は次のようにも綴っている。

> 我々の言語と比較してニュースピークの語彙は実に少なく、さらに削減するための新たな方法がひっきりなしに考案され続けた。ニュースピークは他の言語と異なり、年々語彙が増えるのではなく、減少し続けたのである。選択範囲が狭まれば狭まるほど人を熟考へ誘う力も弱まるのだから、語彙の減少はすなわち利益であった。（同書473―474頁　※原文を基に一部改訳）

しっくりくる言葉を探し、類似した言葉の間で迷いつつ選び取ることは、それ自体が、思考というものの重要な要素を成している。逆に言えば、語彙が減少し、選択できる言葉の範囲が狭まれば、その分だけ「人を熟考へ誘う力も弱まる」ことになり、限られた語彙のうちに示される限られた世界観や価値観へと人々は流れやすくなる。ニュースピークとはまさに、その事態を意図した言語なのである。

１）庵功雄『やさしい日本語――多文化共生社会へ』、岩波新書、2016年
２）オーウェル『1984』田内志文訳、角川文庫、2021年（原典初刊：1949年）

（古田徹也『いつもの言葉を哲学する』（2021年　朝日新聞出版）105頁～115頁）

［設問１］（100点）

筆者は、「〈やさしい日本語〉が日本語それ自体の規範になってはならない」（下線部）と主張している。筆者のこの主張の趣旨を400字以内で要約しなさい。

［設問２］（200点）

筆者が言う〈やさしい日本語〉を用いるべき場面の具体例と、〈精密コードとしての日本語〉を用いるべき場面の具体例をそれぞれ挙げながら、筆者の見解に留意しつつ、〈やさしい日本語〉と〈精密コードとしての日本語〉との関係について、あなた自身の考えを1000字以内で述べなさい。